フランク・ザヌはアフリカをどう見誤り、視聴者を誤らせているのか

Eliakim M. Kambale

FF-0002 · v1 · ja · 2026-11-18

翻訳元 en v1

https://contributions-ledger.org/freeforms/ff-0002/v1/ja/

フランク・ザヌが好んで使う、問題のある論法

フランク・ザヌはベナン生まれのアメリカ人論評家だ。Zanu Project Rethink というチャンネルを主宰し、アフリカの発展、文化、植民地主義、人種などについて語っている。彼が繰り返し持ち出す議論がある。ゲストに、あるアフリカの言語で「maintenance（維持管理）」を何と言うか尋ねるのだ。自分が認める答えが返ってこないと、その言語には該当する言葉がなく、したがってその文化には概念もないと結論づける。そして、その欠如がアフリカの発展を妨げる一因だとする。この議論は、アフリカ出身の学生二人との対談や、ニック・フレイタスとのインタビューに登場する。本稿では、この一連の結論をたどり、どこで推論が成り立たなくなるのかを考える。

ザヌがこの議論を展開する場面：9:40–11:00

誤り1：無知に訴える論証

フランクがゲストに、母語で「維持管理」に当たる言葉を尋ねる。その返答から彼の結論に至るまでには、いくつもの前提が挟まっている。最初の前提は、その言葉が存在するならゲストは知っているはずだ、というものだ。知らないなら、言葉自体が存在しないことになる。この時点ですでに論理が崩れている。ゲストが知らないと認めたとしても、わかるのはその時点でその人が知らないということだけだ。その言語にどんな語彙があるかを証明したことにはならない。これは「無知に訴える論証」、ラテン語でいう argumentum ad ignorantiam の典型である。ある人が知らないことを、その何かが存在しない証拠にしてしまうのだ。

ゲストの返答には、いくつもの説明が考えられる。母語を十分に使いこなせないのかもしれない。旧宗主国の言語で教育を受け、専門用語も主にその言語で学んだのかもしれない。経験したことのない職業で使う用語なのかもしれないし、単に思い出せなかっただけかもしれない。ザヌの質問では、こうした可能性を区別できない。それなのに彼は、返答から導ける結論が一つしかないかのように扱っている。

もちろん、その言語の現在の用法には、ぴったり対応する言葉がない可能性もある。しかし、その場合でも、今の語彙だけを見て、その言葉がかつて一度も存在しなかったとは言えない。言語

は変化する。言葉は生まれ、意味を変え、使われなくなり、他の言語から借用される。ある仕事や産業が衰退すれば、そこで使われていた専門用語も消えていくことがある。世代を超えた知識の継承が途切れた場合は、なおさらだ。現在の語彙に見当たらないことから、その言語の話者が過去に何を知っていたかを論じるなら、まず言語の歴史を調べる必要がある。

奴隷制や植民地支配は、そうした喪失をもたらした可能性がある。共同体から強制的に連れ去られた職人は、技を伝えきれなかったかもしれない。強制移住によって弟子と師匠が引き離され、植民地経済の変化や輸入工業製品との競争によって、手仕事を支える生計が成り立たなくなった可能性もある。技そのものが衰えれば、専門用語を使い、教える機会も減りうる。後の世代は、かつて自分たちの共同体にあった技も言葉も、受け継げなかった可能性がある。

教育の変化が、その断絶を深めることも考えられる。家族や徒弟関係を通じて学ぶ技は、学ぶ側と実践する側の継続的な接触によって伝わる。植民地の学校がこうした学び方を置き換えたり、価値の低いものとして扱ったりした地域では、知識を次の世代へ届ける道が失われたかもしれない。新しい学校では、地元の技も、その語彙も教えられなかった可能性がある。その結果、技術的な話題ならヨーロッパの言語で自在に話せるのに、自分の言語では呼び方が出てこない人が育つこともある。その難しさは、どのような教育を受け、何を学ぶ機会があったかを映しているのかもしれない。

ザヌの質問は、こうした歴史を検討しない。継承が途切れた可能性に出会いながら、そもそも伝えるものなどなかった証拠にしてしまう。

誤り2：言語決定論を前提にしている

ある言語に「維持管理」に対応する単語がないと認めたとしても、次の推論はやはり成り立たない。ザヌは、言葉がないことを概念がないことの証拠とみなしている。しかし、言葉と概念は別のものだ。考えは、言い回しや説明、あるいは複数のより具体的な用語によっても表せる。英語が「maintenance」という一語でまとめていることを、道具を手入れする、建物の手入れをする、機械を動く状態に保つ、といった別々の表現で説明する言語もありうる。全体をまとめる一語がないからといって、それらの行為や目的が知られていないことにはならない。

この推論は、言語決定論の強い解釈に依存している。人が使える語彙によって、理解できることの範囲まで決まる、という考えだ。だが、会話そのものが、その前提を疑う材料を示している。ゲストが「世話をする」のような表現を挙げるとき、その人はすでに知っている言葉で考えを説明しようとしている。ザヌが、それで自分の意図する意味を正確に表せるのかと問うこと自体は、もっともだ。しかし、厳密な訳として認められないことと、ゲストが意味の違いを理解できないことは同じではない。予防的な手入れ、保存、修理について、その人が何を理解しているかを調べなければならない。ザヌはそれをせず、翻訳の問題が、思考の問題にまで決着をつけたかのように扱っている。

defenestration という英語を考えてみよう。人を窓から投げ落とす行為を指す言葉だ。中国語の普通話での訳は 把……抛出窗外 で、文字どおり「……を窓の外へ投げる」という意味になる。一つの専用語ではなく、複数の語で行為を表している。同様の表現はアラビア語やヒンディー語にも見られ、タガログ語では動詞 defenestrate に対応する表現が確認できる。専用の単語がな

くても、その行為を理解し、説明し、実行することさえできる。これらの言語の話者が、言い回しを通じて人を窓から投げ落とすことを理解できるのなら、なぜアフリカの言語の話者には、維 持管理を理解するために単独の一語が必要なのだろう。

誤り3：早まった一般化

仮にザヌが、ある特定の言語にはその言葉も概念もないと証明できたとしても、その結論を大陸全体に広げる根拠が必要になる。彼のゲストが、アフリカにあるすべての言語、共同体、職業、伝統を代表することはできない。これは早まった一般化だ。示された証拠が支えられる範囲を、結論が超えている。数人に質問したからといって、その返答がアフリカ全体についての発見になるわけではない。

誤り4：根拠のない因果関係

因果関係についても、裏づけのない推論がある。言葉の欠如と維持管理の不備が両方とも確認されたとしても、同時に存在するだけでは、一方が他方を引き起こすとは証明できない。語彙が実践を形づくるのか、実践が語彙を形づくるのか。それとも、両方が別の事情を反映しているのか。ザヌには、これらを区別できる証拠が必要だ。彼の質問は何も示していないのに、その答えが発展の問題を説明する役割まで負わされている。

維持管理の意味を知ること、それを大切だと考えること、そして実際に継続して行うことは、それぞれ異なる。ある共同体が予防的な手入れを理解していても、安定して実行するための資金、設備、訓練を受けた人材、制度の仕組みが不足していることはありうる。広く手入れが怠られていたとしても、概念を知らない証拠にはならない。理解できていないのか、実行できていないのかを、ザヌは区別しなければならない。語彙を尋ねる質問では、その区別はできない。

誤り5：結論が前提から導けない

それまでの主張がすべて正しくても、「アフリカは発展できない」という結論は、そこからは導けない。現在の不足は、永久に能力がないことを意味しない。人は知識を身につけ、実践を変え、その変化を支える制度をつくることができる。言語も、それを表すために必要な語彙を生み出せる。「この概念がない」から「この社会は発展できない」への飛躍は、non sequitur に当たる。ラテン語で「そこからは導かれない」という意味だ。この結論を正当化するには、想定されている不足が、なぜ将来も決して克服されないのかを示さなければならない。一つの言葉についての質問は、そんなことまで証明していない。

話し言葉としてのヘブライ語の復興は、言語が新しい必要に応じて語彙を広げられることを示している。この動きは、イスラエル建国の数十年前に始まっていた。ヘブライ語は宗教、文学、学術の場で使われ続けていたが、日常生活で使うためには、当時の活動を表す語彙が必要だった。教師や言語委員会は、古い言葉を復活させ、新しい意味を与え、用語をつくり、他言語からも借用した。数学、建設、木工などの分野にも用語が整えられた。語彙の不足は、取り組むべき仕事だった。アフリカの言語に想定上の空白があるとして、なぜその話者には同じことが永久にできないという証明になるのだろう。

おわりに

フランクは、これらの誤りに気づいていないのか。それとも気づいていながら、意図的に視聴者を誤らせ続けているのか。私にはわからない。

ここから何を学べばよいのか。自信をもって話す人は、誤った推論にも筋が通っているように思わせられる、ということだ。権威があるように見えることが、話し手への信頼に働きかける エートス を支える。アフリカの過去への不安や、その未来が見通せないことが、感情に働きかける パトス を支える。そして結論の連なりが、論理に訴える ロゴス があるように見せる。

同じような近道は、刑務所に入る女性が少ないことを、女性は暴力的でない、あるいは優しいという証拠に変えてしまう。その一方で、相手を辱め、悪意あるうわさを広め、虚偽だと知りながら告発し、社会的なつながりから排除することで、女性も他人を傷つけうるという点が見落とされる。黒人の多い地区での暴力を、黒人は 知能指数（IQ） が低いという主張に変え、スポーツでの成功を、遺伝的に肉体労働にしか向いていないという主張に変える。あるいは、数学や工学の分野にアジア系の人が多いことを、生まれつきの人種的優越性の証拠にする。どの場合も、結論は観察から言える範囲を超えている。

複雑な説明を理解するには、労力がいる。誰かの話を聞いて、ようやくすべてが「腑に落ちた」と感じる。その安堵が、疑問を持つのをやめ、説明を絶対的な真実として受け入れる理由になることがある。話が一貫して見え、もともとの疑いまで裏づけてくれると、実際に確かめられたことがどれほど少ないかを、見落としやすくなる。

引用情報

Eliakim M. Kambale. (2026-11-18). フランク・ザヌはアフリカをどう見誤り、視聴者を誤らせているのか. Freeforms, FF-0002, 版 1 (ja). https://contributions-ledger.org/freeforms/ff-0002/v1/ja/